巻頭言：小さな神

熊田陽一郎

先日、「小さな神」について考える機会があった。このテーマはディオニシスの神名論では、第九章に「大きな神」と対になって扱われているが、それは「同・異、類似・非類似、静・動」といった一連の対概念の中で考察される。そうしてみるとこれらの概念対は、プラトンのパルメニデスに現われ、新プラトン派に受け継がれては世界を構成するために使われたカテゴリアイが、こういう形でディオニシオスに伝えられたものであろう。

所で彼がこの「小さいもの」（σμικρόν, λεπτόν）を神の名前として扱う時、その根拠として引かれる聖書のテキストは、列王記上19・12にある「仄かな空気の響きがして、そこに

神が居られた」という預言者エリヤの体験なのである。モーゼのシナイ登高におけるような火と大風の中にではなく、仄かな息吹のなかに預言者は神と出会う。

この体験を基として語られる「小さい神」の特質は「すべてのものを通して妨げなく進む」という神の運動の自在さであり、「神は魂と霊の境に達し……心の計らいと思考を分かつ」というヘブライ書の個所が引かれる。

そしてこの小さな神は万物の要素因（αἴτιον στοιχεῖον）であり、「量なく大きさなく打ち克ち難く（ἀκρατές：無力という意味もある）、無限にして無限定、全てを包むけれども自らは包まれることがない。」

この最後の辺りの描写は、不思議なことに「大きな神」の特質と共通である。そうしてみると、この「小さな神」とは、我々が通常イメージする「大きな神」の対極にありながら、これを補う働きをしているのかも知れない。ニコラス・クザーヌスがその「神の視」でいっているように、我々人間が神を視るその像は、神が我々の眼を通して視給う自らの像に外ならないとすれば、こうして現われた「小さな神」の像は、神自身の視線の内に現われた神の姿なのである。

そしてこの「小さい神」の姿は、我々キリスト教徒にとってこそ重要な意味を持つものでは

ないか。というのは、キリスト教は人間となった神、受肉した神を中心教義としてもつからである。神は小さな幼児として生れ、十字架の上で力なく死んだ。これが神とすれば、神は本質的に変わったのか？

否、神は本来小さかったからこそ、神としての本質を変えることなく人間となったのではないか。そしてこの「小さい神」はいかなる妨げもなく、すべての人間の心に沁み、魂を貫いてくる。すべてを形成する根源的要素として、すべてのなかに秘やかに内在している。

今この小さな神は、我々の心を貫く。この神こそが、大いなる神を造形した人間の、自己巨大化の誤ちを正してくれるのではないか。唯一なる神を信じるという人々が、「偉大なる神」と唱えつつ、これを自らの勢力拡大のイデオロギーとしている時に、「仄かな息吹」として体験される小さな神は、益々切実に我々の心と魂の境に迫ってくるのではないか。